



Title	西田幾多郎における「形なきもの」と「形」：邂逅の哲学に向かって
Author(s)	眞田, 航
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101597
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (眞 田 航)	
論文題名	西田幾多郎における「形なきもの」と「形」：邂逅の哲学に向かって
論文内容の要旨	
<p>本論文は、西田幾多郎（1870-1945）の思想的遍歴を、「形なきもの」と「形」という観点からたどる。それを通じて、とりわけ『無の自覚的限定』（1932）以降の西田哲学を「邂逅の哲学」として再解釈することを目指す。従来、西田哲学は関係主義として解釈されてきたが、本論文は、単数の全体性をいかなる意味でも想定しない「形」の多元的存在論を後期西田から引き出し、それを「邂逅」という主題のもとにまとめる。</p> <p>まず、第Ⅰ部「「形なきもの」の一元的存在論」（第1章から第4章）では、最初期から『無の自覚的限定』にいたるまでの西田の思想的遍歴をたどる。この時期の西田はおおむね、限界づけられた「形」を脱却し、限界なき単数の全体としての「形なきもの」へと深化することを求めている。</p> <p>第1章「純粹経験論の生成——『善の研究』以前の思想的変遷」では、『善の研究』（1911）にいたるまでの西田の歩みをたどる。1880年代の西田は原子論を採用し、あらゆる存在者たちを無数の原子へと還元するという意味で、「形」を「形なきもの」に解消してしまう。しかしその後、西田は1890年代には超越論哲学に、そして1900年代には経験論哲学に傾斜しながら、すべてがひとつつながりであることを前提視する〈関係主義的な統一〉の立場に立つようになる。その立場は、1880年代とは逆に、「形」を単数の全体に還元するという意味で、「形」を「形なきもの」に解消することになる。</p> <p>第2章「純粹経験論の二面性——『善の研究』読解」では、『善の研究』の純粹経験論を検討する。まず、とりわけ第一編「純粹経験」の細部に着目することによって、その純粹経験論が必ずしも〈関係主義的な統一〉＝「形なきもの」を志向するだけではなく、むしろ、ある一定のまとまり＝「形」にあたる次元を基礎とする多元的存在論を示唆していることを示す。しかし第二編「実在」以降では、西田が〈関係主義的な統一〉への傾斜を深めていくことも明らかにする。</p> <p>第3章「形に抹消線を引く——前期西田の自覚論」では、前期西田における「自覚」と「絶対自由の意志」について検討する。まず、高橋里美による『善の研究』への批判をみることで、前期西田のモチベーションを確認する。そのモチベーションとは、純粹経験＝実在＝事実の「自覚」の運動によって意味の次元が分節化されることを示すことである。次いで、西田がヘーゲルを援用しながらおこなった自同律の分析を検討し、「自覚」が自己疎外と自己回復の往還運動であることを明らかにする。その後、西田が絶対的実在の次元として提示する「絶対自由の意志」を検討する。その結果、前期西田が、あらゆる存在者を単数の実在、すなわち「形なきもの」に根差すものとみなしていることが明らかになる。</p> <p>第4章「暗黒、あるいは輝きそのものへ——「絶対無の場所」について」では、『働くものから見るものへ』（1927）後編と『一般者の自覚的体系』（1930）を検討する。そこでは、『働くものから見るものへ』というタイトルから明らかのように、絶対的な運動（＝「働くもの」）としての「絶対自由の意志」がいまだ有限性のくびきを脱していないもの（＝「形」）として相対化され、そのような「働くもの」を超越した「見るもの」（＝より純粹な「形なきもの」）を絶対的実在とみなすようになる。その実在こそが「絶対無の場所」であり、それは絶対的に透明な普遍性として描かれることになる。</p> <p>『一般者の自覚的体系』のあと、『無の自覚的限定』にいたって、西田哲学は大きな転回をむかえる。それに応じて、本論文は第Ⅱ部「「形」の多元的存在論」（第5章から第8章）へと突入する。第Ⅱ部では、後期西田においては有限な「形」こそが実在の次元に位置づけられること、そしてその結果として、無数の「形」が無根拠に並立し、無根拠に邂逅することが肯定されることを示す。</p>	

第5章「邂逅の哲学へ——『無の自覚的限定』における西田哲学の切断」では、『無の自覚的限定』を「邂逅の哲学」として再解釈する。西田は同書において「絶対無」すなわち「形なきもの」の位置づけを大きく変更し、個々の存在者たちのあいだに横たわる無限の間隔を意味するものとして描き直す。本章はこの点に注目し、西田哲学の主要モチーフが、ただひとつの事実への深化から、いくつもの事実の並立と邂逅へと変化したことを明らかにする。また、西田は「弁証法」を非連続と連続の併存として提示しはじめたことも示す。

第6章「課題に解を与える——行為的直観について」では、後期西田の鍵概念のひとつである「行為的直観」について検討する。そこでは、その「行為的直観」が、能動と受動、非連続と連続の併存を意味していることを明らかにする。その上で、西田がその微妙なステータスを「課題」に解を与えることとして描いている点について検討する。

第7章「形の可傷性、単独性、反復——多元的存在論へ」では、後期西田の「形」概念について検討し、後期西田哲学を多元的存在論として再解釈する。まずは「形」が「多と一との矛盾的自己同一」と定義されていることに注目し、それが、絶対的に非連続な「多」の邂逅においてかろうじて取り結ばれるまとまりであることを明らかにする。それゆえ、「形」はつねに、まったくの別物にメタモルフォーゼしてしまう可能性に晒されている。また、その「形」それ自体が、周囲の連続性から切断された単独性をもつこと、すなわち、それ自体が絶対的な「多」のひとつであることも明らかにする。

そして西田は、すべての存在者をそのような「形」として描くようになる。つまり、あらゆる存在者が「他ならぬこの」ものとして単独性をもつことを肯定する「形」の多元的存在論を提示するのである。

本章の最後には、後期西田における「形」の反復をめぐる議論とニーチェの永劫回帰論の再解釈を組み合わせる。そこで明らかになるのは、「形」の反復が「形」をあたかも安定したものである「かのように」すると同時に、その裏面においてその「形」の可傷性を際立たせもするという両義性をもつこと、である。

第8章「いくつもの共同性を乗り越え——種の「無数」性について」では、後期西田における「無数なる種」というアイデアを、西田によるライブニッツ批判との関連をふまえながら再解釈する。それを通じて、本章は、ひとつの共同性（それも「形」である）が固定化し、私たちを抑圧するようになったとき、私たちはいかにしてそれに抵抗し、みずからの自由を確保することができるのかという実践的な課題に取り組む。結果として本章では、私たちはミクロなものからマクロなものまで、さまざまな共同性を乗り越えながら生きているということ、そしてその無数の共同性のあいだのずれを際立たせていくことで、私たちは抑圧的な共同性から距離を取って自由を確保することができるということを、後期西田哲学から導き出す。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (眞 田 航)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	村上 靖彦
	副 査	教授	野尻 英一
	副 査	学外委員	檜垣 立哉 (専修大学文学部/教授)

論文審査の結果の要旨

眞田航さんの博士号申請論文『西田幾多郎における「形なきもの」と「形」邂逅の哲学に向かって』は、日本を代表する哲学者であり内外で多くの先行研究がある西田幾多郎について、「邂逅」と「軋轢」を軸とした「多元論的存在論」の哲学であるという斬新な解釈を提示する哲学研究である。

本論文において眞田さんは最初の主著『善の研究』に先立つ習作期の論文や書簡から、最晩年に翼賛体制にコミットした政治的な言説に至る障害全体の丁寧な追い、膨大な二次文献および関連する哲学文献を丁寧に追い。思想の成熟と時勢におもねった墮落も含めて包括的に考察している。

まず序論においては西田が育った明治時代の知的風土を近年では顧みられなくなった倉田百三のような現在は読まれなくなった論者まで渉獵することで描き出し、国民国家の成立という当時の政治状況との関係のなかに西田の思想的な出発点を位置づけようとする。時代背景の検討を通して、西田の生涯のテーマとなる全体と個別の関係、個別性を維持しながらいかにして全体との関係をつくるのかというテーマが取り出される。これを眞田さんは「関係論的な統一」と呼んでいる。

第1章「純粋経験論の生成——『善の研究』以前の思想的変遷」においては、学生時代から始まる西田の習作期のテキストについて、個人主義的原子論的な主張への傾きと、全体論への傾きのあいだで揺れ動く姿を描く。これによって全体と個別のどちらに重きを置くのかという主題が、最初期からあったことを示す。

第2章では西田の著作中もっとも知られる『善の研究』を検討する。この著作については先行研究において純粋経験の統一性を強く読み込む解釈が多いが、眞田さんは個々の経験の「結合と衝突」を西田は主張していたと解釈し多元論的存在論を提案するとともに、西田がそこから全体論的な議論へと戻るといふ曖昧な身振りを明らかにする。

第3章では、『善の研究』に続く三つの著作、『自覚に於ける直観と反省』、『意識の問題』、『芸術と道徳』を扱う。高橋里美の批判に答える形で、西田は反省・自己意識すなわち純粋経験についての「自覚」の契機を発見することになる。自覚を導入することで、「西田は、相対的なもの(意味とか仮象と呼ばれるもの)が、絶対的なもの(実在＝純粋経験)の自己反省運動のなかで生成することを示そうとしている」(p. 71)。つまり意味と事実の関係という近代哲学の主要テーマについて西田が関係論的な統一という視点からどのような回答を与えたのかを確認するのだ。

ここで眞田さんは、マルクス・ガブリエルやスラヴォイ・ジジェクといった現代思想と西田の近さに触れるとともに、ヘーゲル、フィヒテ、シェリングといったドイツ観念論とりわけヘーゲルの『エンツィクロペディ』について西田が論じた箇所から関係を議論している。

さらに『意識の問題』における印象派を始めとした絵画論を参照したのちに、西田の議論が個性性を全体との関係から考えようとしたがゆえにかえって個性性が抹消されてしまうというライブニッツと同様の陥穽に陥ったことを示す。

第4章「暗黒、あるいは耀きそのものへ——「絶対無の場所」について」では、『働くものから見るものへ』および『一般者に於ける自覚的体系』を検討している。ここで西田が意志の背景にある直観の場として「絶対無の場所」を提示したことを検討している。場所が可能にする包摂関係によって秩序がそこに基づく直接経験を西田が提示したことを示す。場の論理によって、哲学者が経験の根拠としての無意味を主張するというのだ。無意味の側面を重視することが本論文の特徴となる。

第5章「邂逅の哲学へ——『無の自覚的限定』における西田哲学の切断」では『無の自覚的限定』(1932)を検討する。ここで「邂逅」という本博士論文でもっとも重要な概念が提案される。酒井直樹が西田の主体概念を検討した論考を建設的に再批判するというしかたで、眞田さんは、西田が絶対無の場が“媒介者により融合した全体”であるとする一般に流布してい

る西田論の姿を批判し「邂逅」としての主体という発想を導き出す。眞田さんは「私たちはその根底において非連続を生きながら、しかしその上で連続性を生きてもいる。このような無意味な事実の乱立と再現－表象による普遍性の併存を、西田は議論している」と主張しながら、出会いがもつ非連続性を重視する方向性へと西田を読み込もうとする。人間は無意味な事実との邂逅と、それを表象することで意味へと回収する次元の2つの次元を同時に生きているというのだ

第6章「課題に解を与える——行為的直観について」では、『無の自覚的限定』につづく後期の著作が扱われる。本章では西田の多元的存在論を「形から形へ」の推移として考えている。個別者を全体へと回収することを防ぐために西田は目的論的時間を廃して現在中心主義を取る。今現在の瞬間の「形」において偶然出会うものを強調するのだという。現在から別の現在への「矛盾的自己同一」のなかで「形」が別の「形」へと推移する。このような飛躍を強調することは、眞田さんの論文の大きな独創性となっている。

そのうえで、眞田さんは飛躍を強調する非連続性と、表象により連続性を回復する動きとが並列する事態を西田が「弁証法」と呼んでいたことを示す。もう一つの統一は、能動性と受動性の統一である。この問題を西田は「行為的直観」という概念によって解決した。「悪魔的」に迫ってくるものを受動的に受容する直観と自由な行為との統一である。

第7章「形」の多元的存在論では形の存在論の含意が決定される。ライプニッツ的な全体性への回収に対抗する瞬間瞬間の「不安定な結ばれ」から読み込むのだ。この切断面としての現在を強調するために、西田はベルクソンの持続概念をも「現在がない」と批判するという。こうして「形」とは、その内部に切断を含みこんだある一定のまとまりであると同時に、その外部に対しても切断された「他ならぬこの」まとまりであると言うことができるだろう。」と結論付けられることになる。形と形の軋轢を強調するがゆえに眞田さんは西田において「多元的存在論」を主張することになる。

第8章「いくつもの共同性を跨ぎ越す——種の「無数」性について」では、第7章でいったん提示された多元論的存在論を西田自身が全体論へと回収し否定してしまう場面についての検討がされることで本論文が閉じられる。とりわけ全体と個別者を媒介とする「種」という概念によって「社会」の水準が検討されるのだが、この社会への帰属を西田が単一の社会への帰属として考えたがゆえに多元性が損なわれてしまうことを眞田さんは見出している。逆に言うとも質な種への帰属を想定することでライプニッツ主義と呼ばれた全体論的な傾向は克服されることが西田自身の議論を踏み越える形で示される。

以上のように、眞田航さんの論文は日本哲学史上最大の人物である西田幾多郎について新たな解釈を提示するとともに日本社会に対してのアクチュアリティを示し、博士(人間科学)にふさわしいものであると判断できた。